

会 報

ミライビキ

平成30年3月
第127号
東京都立学校
情緒障害
教育研究会

学校経営課題の一つである、

特別支援教室の実効的な運営を目指す

東京都立学校情緒障害教育研究会会長

狛江市立狛江第三小学校長 渡辺秀貴



延べ七二二人が研修に参加

平成二十九年度の東京都立学校情緒障害教育研究会の活動成果の一端が、この研修参加者数に現れています。全都を対象に、五月に実施した本会の実態調査によると、特別支援教室の拠点校から巡回担当教員として各校の指導に当たっている教員の約八〇％が、教職経験年数五年未満という実態が明らかになりました。情緒障害教育における「専門性を担保する」という点で、大きな課題があることが分かります。配置された教員が、まず、基本的な指導スキルを身に付け、実践的に高めていく仕組みを実効的なものとするのが現実的な大きな課題だと言えます。

本研究会が五つの各ブロックで、ほぼ一ヶ月に一度実施している研修会に、これだけの教員が集う理由がここにあります。今年度の研修会の実施状況は次ページの通りです。下記

の表は、第五回のブロック研修会の実施状況を切り取ったものです。各地区の実態に応じてテーマを設定し、講師を選定して障害教育と対象児童・生徒への具体的な対応について、教員が学べる研修とともに、各地区の巡回指導体制の状況についても情報を交流し、よりよいアイデアを習得する貴重な機会となっています。研修会のテーマを見ると、当該教員の研修ニーズを読み取ることができます。

巡回指導体制の現状認識と課題の明確化による対応を具体化する

今号では、秋季セミナーでの教育庁指導部主任指導主事 島添聡先生と私との対談を特集しました。そこでは、通常学級での指導経験のない教員が、支援を要する児童に、通常級で円滑な学級活動を行うための指導をすることは容易なことではない。・拠点校から、他校の特別支援教室で指導する前提には、当該

平成29年度都情研第5回ブロック研修会（10月10日 午後2時30分開始）の概要

ブロック	場所	テーマ・内容	講師	参加数
東	葛飾区立宝木塚小学校・体育館	「生きる力を育てる」発達障害教育	NPO法人翔和学園 学園長 伊藤 寛晃 先生	128
北	杉並区立高井戸中学校・多目的ホール	アセスメントと個別指導計画	杉並区立済美教育センター 指導教授 月森 久江 先生	118
南	世田谷区立京西小学校・多目的室	児童の実態に応じた小集団指導を考える	元情緒障害等通級指導学級教員 齋藤 真理子 先生	106
多摩北	西東京市立伏見小学校・ランチルーム	子供をどう見立てて指導を考えるか PartⅡ ―事例を通して―	元町田市立南成瀬小学校コミュニケーションの教室主幹教諭 伊藤 久美 先生	130
多摩南	府中市立住吉小学校・体育館	視覚認知の検査と評価、指導方法について	米国心理士 Vision Therapist 梁田 明 先生	146
合計				651人

が今後の課題となる。などが話題となりました。
通常学級の学級経営上、発達に課題のある児童へのきめ細やかな配慮は欠かせません。このこと無くして授業の充実もないでしょう。つまり、この特別支援教室制度の質を上げていくことは、学校経営課題に直結している重要なことだという認識を管理職をはじめ全教職員がもち、運用上起こる様々な課題を解決していく必要があるということです。

都情研では、各ブロックの副会長や担当校長のリーダーシップの下に、企画運営本部を中心として、「都情研の研修に参加すれば、現場ニーズに応じた最先端の学びができる」という研究・研修風土ができていくとあります。「勉強して力を付けて対象児の成長を促したい」という教員のモチベーションを高めるとともに、研修に参加できる機会を保障する管理職の一層のご理解とご協力をお願いします。

○平成三〇年度「定期総会」案内
【日時】四月十七日（火）十四時十五分開場

【場所】ルネ小平 小平市民文化会館 大ホール（一〇〇〇名）

【記念講演】「作業療法と発達障害のアセスメント ―感覚や運動の視点からの実態把握と指導について―」

* 神奈川県立保健福祉大学教授

笹田 哲 先生

研修会名	企画	期日	時間	場所	内容・テーマ・流題	講師	定員または参加者数
定期総会記念講演会	本部 多摩南	4月18日	14:40	調布市グリーンホール・大ホール	「発達障害における青年・成人期から学校教育を考える～児童・生徒の将来を見通した特別支援教育とは～」	早稲田大学臨床心理士 長岡恵理氏 CotoCO研究所長野市部長 月岡タツミ氏	820
第1回ブロック研修会	東	5月16日	14:30		都情研の研修について ブロック研修会計画立案等	ブロック担当校長	124
	北	5月16日	14:30		都情研の研修について ブロック研修会計画立案等	ブロック担当校長	92
	南	5月16日	14:30		都情研の研修について ブロック研修会計画立案等	ブロック担当校長	147
	多摩南	5月16日	14:30		都情研の研修について ブロック研修会計画立案等	ブロック担当校長	120
	多摩北	5月16日	14:30		都情研の研修について ブロック研修会計画立案等	ブロック担当校長	85
	第1回ブロック研修会 合計（人）						
第2回ブロック研修会	東・南	6月20日	14:30	世田谷区立山田山民館・ホール	入門研修「自閉症スペクトラムとその周辺の障害特性について」	新宿区教育委員会特別支援教育相談員 長谷川安佐子先生	225
	北	6月20日	14:30	豊島区立南池袋小学校・体育館	入門研修「自閉症スペクトラムとその周辺の障害特性について」	江戸川区本一色小学校 指導教諭 有澤直人先生	129
	多摩南 多摩北	6月20日	14:30	ルネこだいら・中ホール	入門研修「自閉症スペクトラムとその周辺の障害特性について」	府中市立府中第三小学校 安齋佳子先生	169
	第2回ブロック研修会 合計（人）						
第3回ブロック研修会	東・南	7月4日	14:30	国立オリンピック記念青少年総合センター・センター棟501号室	入門研修「発達障害児の理解と指導」	新宿区教育委員会特別支援教育相談員 長谷川安佐子先生	206
	北	7月4日	14:30	豊島区立目白小学校・体育館	入門研修「発達障がい特性に応じた指導の在り方」	江戸川区本一色小学校 指導教諭 有澤直人先生	135
	多摩南 多摩北	7月4日	14:30	ルネこだいら・中ホール	入門研修「特別支援教室での指導について～府中市の取り組み～」	府中市立府中第三小学校 安齋佳子先生 立川未奈先生	176
	第3回ブロック研修会 合計（人）						
研究大会2日目	本部	7月27日	午前午後	帝京平成大学池袋キャンパス	「共生社会の形成のために果たす学校教育の役割～自閉症スペクトラムを中心とする特別支援教育における指導者の専門性とは～」	基調講演 文科省 特別支援教育課長 中村信一氏 シンポジウム 東京学芸大学名誉教授 野村東助氏 他4名	980
研究大会3日目	本部	7月28日	午前午後	帝京平成大学池袋キャンパス		記念講演 SpaceZero 水野薫氏 分科会 大正大学 玉井邦大先生、早稲田大学 長岡恵理先生、北海道大学 岡田哲氏、帝京平成大学 奥井智一朗先生、臨床心理士SV 橋場隆先生	
課題研修会	本部	8月3日	午前午後	大田区民センター・音楽ホール	「発達障害と愛着障害について」 「中学校特別支援教室と自閉症・情緒障害学級の実態と課題」	都立小児総合医療センター 副院長 田中哲先生 中学校情緒通級担任と小学校自閉症・情緒障害学級担任	414
会報「みちびき」125号発行	本部	7月				計4300部	
第4回ブロック研修会	東	9月5日	14:30	江戸川区立東葛西小学校 多目的ホール	「事例をもとに効果的な支援の手立てを考える」	元情緒障害等通級指導学級担任 齋藤眞理子先生	128
	北	9月5日	14:30	台東区立大正小学校・体育館	「WISC-IV知能検査の概要と活用」	SpaceZero心理・教育研究所長 水野薫先生	146
	南	9月5日	14:30	世田谷区立京西小学校 多目的室	「発達の観点から声かけで子供がかわる～子供達に対する普段からの声かけ、出来事があったときの声かけや質問～」	学校発達心理研究所 窪田憲先生	119
	多摩南	9月5日	14:30	狛江市立緑野小学校 体育館	「教室で体の動きが気になる子の なぜ? と 指導のコツ」	神奈川県立保健福祉大学リハビリテーション学科 作業療法学専攻 大学院保健福祉学科研究科教授 笹田哲先生	189
	多摩北	9月5日	14:30	小平市立小平第六小学校 多目的室	「巡回先での小集団指導の実践発表～小平第六小学校の実践から～」	新宿区教育委員会特別支援教育相談員 長谷川安佐子先生	103
	第4回ブロック研修会 合計（人）						
第5回ブロック研修会	東	10月10日	14:30	葛飾区立宝木塚小学校 体育館	「生きる気力を育てる「発達障害教育」	NPO法人翔和学園学園長 伊藤寛見先生	128
	北	10月10日	14:30	杉並区立高井戸中学校・多目的ホール	「発達に偏りのある児童・生徒への見立てと支援」	杉並区立済美教育センター 指導教授 月森久江先生	118
	南	10月10日	14:30	世田谷区立京西小学校 多目的室	「児童の実態に応じた小集団指導を考える」	元情緒障害等通級指導学級担任 齋藤眞理子先生	130
	多摩南	10月10日	14:30	府中市立住吉小学校 体育館	「視覚認知の検査と評価、指導方法について」	米国心理士 Vision Therapist 築田明教先生	146
	多摩北	10月10日	14:30	昭島市立中神小学校 体育館	「子供をどう見立てて指導を考えるか ～アセスメントのこつ～」 <生育歴、発達歴の聞き取りや押さえどころ(愛着障害との鑑別を含む)や行動観察のこつ、発達検査の見方など>	Space Zero PDD 心理・教育研究所所長 水野薫先生	129
	第5回ブロック研修会 合計（人）						
都情研セミナー	本部	11月14日	14:30	国立オリンピック記念青少年総合センター・カルチャー棟大ホール	～校長、指導主事、学級主任は聞いておかないと損をする！～ 「特別支援教室の現状と課題」	東京都教育庁都立学校教育部主任指導主事 島添聡先生	543
第6回ブロック研修会	東	12月5日	14:30	江東区立南砂小学校・ランチルーム	「授業に参加できない児童の背景と対応について」	リソースセンターone 上原芳枝先生	107
	北	12月5日	14:30	北区立八幡小学校・体育館	「アセスメントと個別指導計画」	杉並区立済美教育センター 指導教授 月森久江先生	132
	南	12月5日	14:30	国立オリンピック記念青少年総合センター・センター棟3階309号室	「特別支援教室の効果的な指導とは？～実践例から考える～」	Space Zero PDD 心理・教育研究所所長 水野薫先生	106
	多摩南	12月5日	14:30	府中市立府中第三小学校・体育館	「特別支援教室における社会性を育てる指導」	明星大学心理部心理学科 教授 小貫悟先生	97
	多摩北	12月5日	14:30	西東京市立東伏見小学校・ランチルーム	「子供をどう見立てて指導を考えるか Part II ～事例を通して～」	元町田市立南成瀬小学校コミュニケーションの教室 主幹教諭 伊藤久美先生	89
	第6回ブロック研修会 合計（人）						
会報「みちびき」126号発行	本部	12月				計4300部	
第7回ブロック研修会	地区	2月6日	14:30		各地区において		
会報「みちびき」127号発行	本部	3月				計4300部	
平成29年度活動報告資料	本部	3月			発行		
全研修会参加者合計（人）							7212

平成 30 年度 都情研活動計画 (案)

月	日	曜	研修会名、事業名
4	10	火	企画運営本部委員研修会①
	17	火	第 1 回 企画運営本部会・役員会
		火	平成 30 年度 定期総会・記念講演会
		火	地区ブロック本部会 (5 地区合同)
5	8	火	企画運営本部委員研修会②
	15	火	第 1 回 地区ブロック研修会 (都情研入門)
	-	-	●各地区実態調査 (基準日 5 月 1 日)
6	5	火	企画運営本部委員研修会③
	26	火	第 2 回 地区ブロック研修会 (5 地区合同研修会)
		火	企画運営本部委員研修会④
7	10	火	第 3 回 地区ブロック研修会 (教室・学級運営)
	24	火	企画運営本部委員研修会⑤・研究大会準備作業
	未定	-	★東京都教育委員会との連絡会
			◆会報「みちびき 1 2 8 号」発行
8	2	木	企画運営本部委員研修会⑥・研究大会準備
	3	金	第 3 回 都情研研究大会 (南ブロック大会)
		金	第 2 回 企画運営本部会・役員会 (昼)
	未定	-	★三連協 (都難言、都弱視)
9	4	火	第 4 回 地区ブロック研修会 (専門研修①)
	25	火	企画運営本部委員研修会⑦
10	9	火	第 5 回 地区ブロック研修会 (専門研修②)
	30	火	企画運営本部委員研修会⑧
11	13	火	◎都情研セミナー (主に行政説明)
12	4	火	第 6 回 地区ブロック研修会 (専門研修③)
	11	火	企画運営本部委員研修会⑨
	-	-	◆会報「みちびき 1 2 9 号」発行
1	15	火	地区ブロック本部会 (5 地区合同)
	22	火	企画運営本部委員研修会⑩
2	5	火	第 7 回 地区ブロック研修会 (各区市町村)
	19	火	第 3 回 企画運営本部会・役員会
3	5	火	企画運営本部委員研修会⑪
	未定	-	◆会報「みちびき 1 3 0 号」発行◆都情研「平成 30 年度 活動報告」発行

○今年度を振り返って

今年度の都情研は、『第五十回全国情緒障害教育研究協議会・全情研五十周年記念東京大会』を千人に迫る参加者を集めて無事成功させたことが、何よりも大きな出来事でした。新生都情研の組織力が想像以上に強力であったこと、そしてそれにエールをいただくがごとく、文部科学省や東京都教育委員会、豊島区教育委員会、帝京平成大学を始め、様々な関係機関の方々や講師や発表者の先生方等、皆様が気持ちよく支えてくださったことが、私たち都情研に力を与えてくれたのだと思います。本当にありがとうございました。

平成二十八年二月の臨時総会における会則改正から、早二年が経ちました。新体制を軌道に乗せることと同時に並行で進められた全国大会運営は、正直言って大変なエネルギーを要しましたが、図らずもこれをプラスに活かすことができたのではないかと感じています。年間の都情研参加者数延べ七二二名という数字が物語っているように、専門研修へのニーズは益々高まっています。小学校特別支援教室完全実施に伴い、初めて情緒障害教育に携わる巡回指導教員の参加も急増しています。地区を越えて学び研究し合う都情研の活動が大変貴重であることを自覚し、主体性をもって集うことが一層求められていくでしょう。来年度も運営へのご協力、よろしく願います。

企画運営本部総務 上山雅久

平成二十九年度都情研セミナー

校長、指導主事、学級主任は聞いておかないと損をする

「特別支援教室の現状と課題」

第一部 パネルディスカッション

「特別支援教室の効果的な運営とは」

府中市立府中第三小学校長・本会副会長

宇都宮 聡校長（拠点校校長）

府中市立府中第五小学校長

山下 裕子校長（巡回先校長）

府中市立府中第三小学校特別支援教室主任

立川 未奈主任教諭（拠点校教員）

一府中市の特別支援教室の取り組み

府中市の特別支援教室は、府中市特別支援教育推進計画の第二次推進計画（平成二十六～三十三年度）を基に総合的な教育体制の整備（六十七項目）を実施しています。六つの項目には、通常学級や特別支援学級での支援の充実や校内委員会の一層の充実があります。また、個別指導計画・個別の教育支援計画等の充実があり、切れ目のない支援の継続を導入しています。これからの特別支援教育を充実するために、府中市では小学校が平成三十年度全校実施、中学校は平成三十一年度モデル校実施をし、実績を踏まえた上で来

年から全校実施となります。

二府中市立府中第三小学校の取り組み

府中市立府中第三小学校では、府中市の教育委員会研究協力校として「ユニバーサルデザインの研究」を実施しています。研究主題「児童が主体的に取り組む『分かる授業』を目指して」ユニバーサルデザインの指導方法を生かして」を決め、子供たちを支援する環境として包み込むモデルを参考に二点の基本的な考え方に取り組みました。一つ目は、「分かる授業」の実践、二つ目は、環境整備です。

一つ目の「分かる授業」の実践では、ユニバーサルデザインの指導方法の考え方を授業検証していく上で七つの視点（①視覚化②構造化③共有化④ユニット化⑤焦点化⑥個別的な配慮⑦ICTの活用）を取り入れました。例えば、視覚化での教材の提示やサイドラインの工夫、構造化で導入・展開・展開2・山場・まとめなどの全体の流れを把握すること、焦点化ではしかけ文や板書・ワークシートの工夫、共有化でタブレットの使用やグループでの話し合いなどが挙げられます。また、組織的な

取り組みとして、校内委員会「JETS校内委員会」のマニュアルを作成しました。

二つ目の環境整備では、学級・学校の環境整備としてQ・Uテストによる人的環境分析を取り入れ、学級満足度と学校生活意欲の分析を行い、各学年・学級で調整して職員全体で確認作業に取り組みました。また、教室環境やICTの整備として、全ての教室で同じ掲示を行い前面に貼らないような配慮や大型テレビ・タブレットパソコンを導入し、ユニバーサルデザインにおける「視覚化」の効果を協働学習や個別学習に取り組みました。

三特別支援教室「つばさ」巡回指導の実際

特別支援教室「つばさ」は、平成二十九年度にモデル校として三校を巡回指導しています。各校には週一～二回巡回指導に行き、従来の通級による拠点校での指導も残して実施しています。「つばさ」での指導の基本的な考え方は、自分への感情や気持ちの表出、状況の読み取りや人とのやり取りなど、発達段階を追って積み上げていく指導と日々の生活で起こる様々なトラブルや課題に対しての即応的指導の二本柱を軸に指導しています。

巡回指導で大切なことは三つあり、①チームでの指導、②巡回校とのより密な関わり、③家庭との連携

です。①では、複数の教員が多様な視点で児童と関わり、確かな児童理解と指導につなげていくことが重要です。また、特別支援教室専門員との連携も大切に、「つばさ」の指導が円滑にいくように情報交換を行っています。②では、学校生活における児童の困難さを正確に把握できるような積極的に巡回校と関わることも大切です。課題に対応するためにクラスの様子（授業・給食・清掃・休み時間等）を参観し校内委員会にも参加しています。③では、連絡ファイルの活用が重要です。今まで以上に家庭とつながる重要なファイルとして家庭での様子を把握し、必要に応じて、電話連絡や面談を実施することもあります。

四「つばさ」教室の苦労と成果

巡回指導では、巡回校の理解と協力が必要です。学校の事情により校内委員会が機能していない場合や児童の実態把握のみの場になっている現状もあるので、コーディネーターや管理職の先生方と話をしながら、校内支援の大切さを伝えていきました。特別支援教室専門員を含んだ情報の共有も必要でした。また拠点校で理解を図るため、「つばさ」で在籍学級との交流を充実させ、三年生の全クラスに「つばさ」の理解授業に取り組みました。

「つばさ」の成果として、巡回校の特別支援教育への理解が進み担任

の先生と今まで以上に協力して指導できるようになりました。また、児童の変容も進み、在籍学級で過ごしやすくなりました。巡回校との協力が不可欠で、「一緒に児童を育てる気持ち」で現在も取り組んでいます。

ここからはパネルディスカッションや対談での対話を掲載いたします。

(立川) 通級から特別支援教室になり、教室主任の私の仕事は全体を見るということが主になりました。教室主任が全体を把握できるように指導計画や保護者会の計画、新入級児の連絡などは全て他の先生たちが行ってくれています。

拠点校の理解については、校務分掌を軽減しています。運動会も当日のみの仕事分担であったり、出席する会議も精選したりしています。また、三小では、つばさの理解授業を行っていて、三年生全クラスがつばさ教室に来て、どんな勉強をしているのか体験しています。

成果としては、巡回校の理解が進み、入室申請が極端に増えることがなくなりました。それは、巡回校が「もう少し校内支援をやってみよう」と言ってくれて、校内委員会が充実し始めたからだと考えています。巡回校と連携しやすくなり、担任の先生と今まで以上に連携して指導できるようになりました。巡回校にたく

さん話をした分、理解してくれたと思います。

(山下) 私は巡回校の立場でお話いたします。まずは、巡回指導を受け入れる前の校内体制の整備についてです。私がやったことのほとんどは周知活動です。つばさ教室が本校に巡回することをまずは教職員が共通理解する。子供たちが共通理解する。そして、その背景にいる保護者や地域、コミュニケーションの皆さんにご理解いただくということに一番心をくだきました。元々全ての教職員が巡回指導について同じように理解しているわけではありませんでした。教職員が各クラスで違った言い方で巡回指導について子供たちに話してしまうことがないように、新年度の最初に私が朝会で子供たちにプレゼンを行いました。また、その後で私が原稿を作って、担任の先生に各クラスで子供たちに話してもらいました。保護者全体会で話したり、学校だよりの紙面に載せたり、またそれを地域に配って理解を進めました。

巡回が始まってよかったことは私たち巡回校の教員が直接その指導の様子を見られることです。そのことで、巡回に来ている先生と情報を共有できるということです。例えば、通常の学級の中では意欲が見られずに机に突っ伏していることが多い子が、巡回指導の小集団の中で恥ずかしそうではあるけど発表している姿

を見て、とても嬉しかったです。このように指導してもらっているのだと分かりました。また、通常学級での姿とのギャップにショックを受けました。このことをどのように通常学級の中で生かしていくのかを話し合っていないかなくてはならないと感じました。情報をタイムリーに共有できるからこそ、保護者との連携を迅速に行えることもとても大きなことだと思っています。

今一番感じていることは、拠点校と巡回校がチームになっているということです。例えば、拠点校の校長先生からのご提案で、クラブ活動の曜日や三年生の六時間目まで授業がある日をそろえようということがありました。そろえることによって巡回指導できる枠を大きくしていくというようなことが、学校運営上とても大切なことです。つばさ教室の教育効果を最大限上げていく上で、管理職同士の風通しをよくしておくことができつつあるのがよかったと感じています。

次に、苦労したことです。本当の意味での理解が教職員の中でまだ足りない部分が若干あります。校内委員会をつばさ教室に子供をつなぐためだけのものと考えている教職員もまだあります。まだまだ学級での支援ができるということでは在籍学級での支援に戻していくこともありすが、こういう点でもっと理解を促していかなくはと考えています。

つばさ教室の先生方と本校の教職員との関係づくりはとても気を配っているところです。気兼ねなく相談してもらったり私たちも相談できたという関係をつくりたいと思っています。そういう点では、副校長が潤滑油の役割をしたり、専科の教員がつばさ教室の先生と一緒に給食を食べたり子供たちの情報を共有したりして、いろいろなことがスムーズに話し合えるように気を配りました。

来年度に向けてやっていかねければならないと思っていることは、せっかくつばさ教室の先生が巡回指導に来ているのに、児童の担任が巡回指導の様子を見られないことです。指導の様子やその中で児童のよさを見られるのは大切なことです。見に行ける時間を確保する工夫をしたり、専門員や管理職が見て担任への橋渡しをしたりしていく体制をつくっていくことが大切だと思っています。

最後になりますが、これから府中市全市で本格実施をしていくに当たって、教育委員会への要望です。巡回校は立場や規模の違いがありますが、そうした点をまずご理解いただきたいです。また、ぜひ学校に来て実態把握や理解をしていただきたいと思っています。私たち巡回校も頑張りますが、全体的な体制づくりにおいては教育委員会にリーダーシップをとっていただき、運営がスムーズにいった子供たちのためになるように

踏み込んでいただきたいと思います。

(宇都宮) 特別な支援を要する児童はこの学校にいても同じように必要な支援を受けられなければなりません。そして、特別支援教育に関する考え方も共通でなければなりません。それらのことについて、つばさ教室を中心として、四校の校長が連携して知恵をもち寄って相談しています。

府中市における特別支援教室の取り組みの評価と今後の展望について府中市教育委員会の田村統括指導主事よりお話しいただきます。

(田村) 私は、昨年度からの準備状態を引き継ぐ形でつばさ教室に関わりました。巡回指導をスタートするに当たって基本ベースはできていました。ただ、実際に稼働してみると、今お話があったようないろいろなストレスがあったり困難があったりして、校長先生や立川先生、巡回校からお話を伺いながら、対応してきました。市内全部で実施していくに当たってはモデル校で見えてきた課題に取り組みたいと考えています。

第二部 対談

「特別支援教室の現状と課題」

東京都教育庁都立学校教育部主任指導主事

島添 聡先生

狛江市立狛江第三小学校校長

渡辺 秀貴(本会会長)

(渡辺) ちょうど一年前のセミナーで新しい特別支援教室の制度について話がありました。一年が過ぎ、新しい制度の運営の初期に入り、課題がはつきりしてきました。そして、これからどうしていけばいいのか検討の時期に入っています。今日は四つの柱について話を進めていきたいと思います。

まず、都全体の特別支援教室の対象児童数の増加についてです。

(島添) 平成二十八年度の段階で、都内約六〇〇校の小学校で特別支援教室が開始され、従来型の通級による指導を合わせて年度当初で約九四〇〇人の児童が指導を受けていました。今年五月一日現在、小学校で利用している児童が約一三〇〇〇人です。

(渡辺) 対象児童の急激な増加が分かります。中学校はまだ巡回指導は始まっていますが、対象としている生徒は増えているという調査結果が出ています。

(島添) 中学校の対象生徒数は、小学校で特別支援教室が始まる前から増えてきています。平成二十四年頃

から研修会で発達障害についての話題が出てきましたが、注目度や必要度が上がってきているのではないかと思います。

(渡辺) 平成三十年度から中学校の特別支援教室の本格実施が予定されていますが、小学校と同じようにさらに対象生徒数がぐっと伸びていくことが予想され、小学校とは違った悩み等が出てくると思われます。小学校のことですが、巡回先校での教室の環境整備についての調査結果もあります。このような環境やスペースについては、望ましい状況はどのようなであつたらよろしいのでしょうか。

(島添) まだまだ子供の数がえている地域もありますし、空き教室の状況などもありますので一概には言えませんが、特別支援教室を利用する子供の数が増えてきて稼働率が上がり、兼用教室から専用教室に移ってきているということが読み取れると思います。

(渡辺) これは校長の立場としても学校事情がありまして悩ましいところだと思います。指導に求められる先生方に広いスペースを有効活用していただきたいという願いはもっていますが、学級数が読めないことがあります。校長会や教育委員会がチームになって、予算確保をするなどいろいろな策を講じてスペース確保、環境確保を進めていきたいと思っていますし、都情研からそういうことを強く

発信していきたいと思っています。

次は、配置教員の研修体制についてです。情緒経験年数別人数と割合を見ると、経験年数五年以下が約八割になるといふ数字が出ています。教職経験五年以下の先生方の悩みは相当なものとは校長として受け取っています。

(島添) これは大きな課題です。ベテランの先生方が退職期を迎えて久しいです。学校によっては、五年未満の先生方で半分以上を占めている学校もあります。算定期間の問題もあって、後から教員人数が増える見込みが立つと、教員の異動では対応ができず、新規採用で対応しなければならぬというのが実情です。だから、若手の先生への研修をお願いするという状況はこれから先もずっとあるだろうと思われます。最近出てきている話題は、グループをマネージメントしている拠点校の主任の先生、つまり次の世代の先生方をどう育てていくかということです。各地域では、今まで通級指導を主体的に進めていた方が、拠点校を運営していると思います。その拠点校の数が増えてきているので、若手教員も戦力として頑張っていかなければなりません。新たな仕事として、巡回先ごとの関係づくりが出てきています。巡回先の先生方と交流する場面を通して子供の変容を話題にしながら職員室の中で居場所確保をしていかなければなりません。変わっ



たことがあったら校長先生や副校長先生にすぐに報告できる関係づくりができなければなりません。特別支援教室の拠点・巡回グループをどうしていくかという力が、拠点校の主任の先生に求められるという新たな課題が出てきています。これについては、区市町村やそのグループで研修を進めていかなければならないと思っています。

(渡辺) 拠点校の主任の立場にある先生方の巡回システム運営能力が新たに求められていることを、まず主任の先生方が認識をされ、その力を磨くために研修を積んでいかなければならないと思います。その時に主任同士が高め合うようなグループでの研修などもこれから必要ではないかということでしょうか。それから、新採の人の配置は、やむを得ない部分があるのだと認識するしかないですね。初任者の先生を受け入れてどう回していくかということを主任の先生、拠点校の校長先生、副校長先生が考えていく必要があります。

都情研が昨年、どのくらい研修を行ったか整理してみました。研修本数は三十五回です。ブロック毎に毎月のように行っているブロック研修、夏季課題研修や研究大会、今日のようなセミナーを行っています。二十八年度は延約四五〇〇人の方に参加していただいています。ちなみに二十九年度は、現時点でもう既に延六七八八人の方に参加していただ

いていて、研修ニーズが高まっていることが分かります。やはりしっかりと時間を確保してスキルを上げるための研修にすすんで自ら行く。管理職は送り出す。そして、学んだことを必ず還元させていくということが本当に必要なのだと思います。

三つ目ですが、拠点校と巡回先校との連携ということで、まさに今日のテーマです。先程のシンポジウムの具体的な事例をもとに、整理をしたいと思います。

(島添) 巡回した時の先生たちがどのような所で子供たちの様子を共有していくのか、人間関係をつくっていくのかは課題だと思っています。担任の先生と巡回の先生だけでなく、それを取り巻く、例えば講師の先生、専科の先生、副校長先生、養護教諭の先生との関係づくりが非常に大事なことで、授業の空いている時間をうまく活用していただくといいのは非常に大事なことでと思います。校内委員会に出向いていくということも非常に大事なことでと思っています。今回ご発表いただいたのは指導が終わったあと、お隣の学校に行つて、校内委員会に出るというものでした。これは、関係校の校長先生と担当している先生方が「今これが課題だね、だからこれをやりましょう」という意思統一がないと、例えば何曜日はA小学校だと決めてしまっていると、行けないのですよね。そういう関係がグループの中で

できると、そこは融通して、案件によつては全員の先生が集まらなくても、関わっている方だけが行けばよい訳ですよ。全校展開になつてくると、日程調整、打ち合わせの時間を確保することも難しい状況になると聞きますので、こういう形でやっていただと非常にありがたいと思います。

(渡辺) 拠点校では、何曜日にどここの学校に誰が何時から何時までというような基本のプログラムがないと巡回はできないと思います。しかし、そこに少し柔軟性をもたせて、必要に応じて対応できる体制が必要だと思います。そのためには、拠点校の校長先生が拠点校の校長としての役割とはどういうものなのか、その地域の特性や条件に応じて明確にしたいだく必要があると思います。学校経営計画に拠点校としての役割をどういうふうに位置付けるか、そして職員にどう説明するのかというあたりから考えていく必要があります。

それから、受け入れ校の山下校長先生が具体的なよかったことをたくさん挙げてくださったので、あれを一つの目標にして先生方も動くことができるのではないかと思います。ぜひ、これは自治体の教育委員会が拠点校の校長の役割はこうです、受け入れ校の校長先生方はこういうことについて十分配慮をしてくださいと基本的なものを示していただくと

大変ありがたいですよ。巡回先の学校とフレキシブルな関係ができれば、あとは皆さんこの情緒障害の課題について何とかしたいと思つている訳ですから、動き出すというふうに思います。

ただ、色々お話を伺っていると、二、三校程度ならともかく、五校、七校と担当している学校があるという話もあります。大きな自治体によつては、学校数も多いと思いますが、なかなか難しい現状がありそうなのですけれども。

(島添) 先程ありました通り、教員の数の子供たちの数で決まって、配置については区市町村教育委員会にお願いをしています。拠点校と巡回校のグループを何校にするかというところについても、各自自治体に任されています。なので、自治体ごとに方針をもたれてその数でやられていると思つています。一週間は五日しかありませんので、五日以上の数であれば当然行けない学校が出てくるということです。けれど、その数が多いということは、そこに配置されている先生方の数も多いということで、その中で分担をしてやられているのだと思います。この時に課題になつてくるのは主任の先生が全部を見通せないという問題です。それぞれ巡回の先生は、一、三校受け持つて、グループとして七、八校。これはあると思います。でも、それぞれの学校と拠点校の関係づくりの中心

的な役割はこの主任の先生になるのだと思いますので、この主任の先生の動き方が今後課題になってくると思います。

(渡辺) 本当にここは、悩ましいところ、各自治体の実情がある。先程の児童数の増減の問題や学校数をどうするかということも簡単にはできない部分だと認識しておいた方が気持ちは楽になるかも知れません。ポイントの一つとして、主任の先生の校務分掌の工夫がありました。うまくいっている地域の事例から、その学校にとってより望ましいスタイルを検討していただくとよいと思います。

それから、学級担任の経験がないのに、巡回先で担任の先生と関係性をつくって、しかも、通常学級で困り感を減らしていった、且つその子のもっている能力を発揮できるように指導・支援するということのイメージ化はなかなか難しいですね。

(島添) やはりベースになるような教育観がないと、いろいろな学校を回って、オールマイティな課題に対応をするというのはなかなか難しい。先生方のライフスキルとして、二十年、三十年働き続けることを考えると、その担当だけでいいのかという問題はあると思います。ただ、目先のことだけ思うと、明日の授業をどうしようということになってきますから、最初の頃は、OJTの一

環としてベテランの先生と一緒に回っていただくことが必要だと思います。これまでの通級の特性からすると、学期当初は利用者が少ないですし、最初の一週間程度は巡回しても授業をしないということがありました。その期間をうまく使って、立ち居振る舞いや挨拶の仕方から、OJTの一環としてやっていただくところからお願ひしたいと思っています。

(渡辺) 主任の先生方は、そういう認識をもって、初任者の人材育成計画みたいなものを管理職と共に考えていただく。また初任の若い先生方は、謙虚に大いに学んでいただきたいと思っています。初任研に参加しても通常級の先生方の数の方が多いので、悩みが共有できなくて困っていますという話も耳にします。都情研の地区ブロックで、若い先生方が集まる機会もあるでしょうから、そこで情報交流をしたり、悩みを相談したりしてほしいと思います。

では、最後になります。東京都の第三次計画に基づいて進んでいる訳ですが、現時点で提供していただける情報がありましたら、お話をしたいだけだと思います。

(島添) 先生方の学校に月一回程度、東京都の臨床発達心理士会に委託をして臨床発達心理士の方に巡回していただいています。昨年度は、一部実施も含めて三九の区市町村がこの特別支援教室を導入しました。延約三万一千人の子供たちに巡回の心理

士が関わっています。対象学年では小学校一年生が約七千人で一番多く、小学校六年生になってくると約二千人です。依頼の内容は発達障害の可能性のある子供たちの実態把握とそれについての助言を求めているケースが一番多いです。これに基づいて校内委員会でご検討されるだろうと思います。学校の中でファーストアクションを起こすところに対して心理の専門家から助言をいただいているのが今のほとんどの使い方になっています。特別支援教室での指導終了に関する助言は全体の約一%しかありません。ここが課題だと思っています。先の見通しをもった目標設定ができていないということ、これができていないと、終わりの目処が立たないままの利用のスタートということになります。どこまでいったら終了なのか、振り返りをして再評価をするということが課題だと思っています。今後、短期利用が効果的だという子も出てくると思うのです。その時にも、スタート時に終了のイメージをもたないといけないと思います。

それから、都全体の施策として、高校に三つの施策を行います。一つは教育課程外でSSTを中心とした講座を外部委託をして、土曜日にやっています。夏休みもやりました。二つ目は、秋留台高校で高校の通級を試行的に実施する準備をしていて、来年度スタートする予定です。

説明会なども始まっていて、保護者の方からのお問い合わせも多いと聞いています。三つ目は、都立高校の自由選択科目の一つにこのSSTを中心とした指導内容を入れていくということを広めていきたいと思っています。既にエンカレッジスクールやチャレンジスクールでは、そういう指導内容が入った自由選択の講座ができています。

今、中学校では四区市で特別支援教室のモデル事業をやっていて、今年度末にはガイドラインをお示できるとなっています。中学校でのモデルの様子を皆さんにお知らせして、来年度、準備の整った市区町村から順次導入をしていきたいと考えています。三十三年度には、全中学校、公立の中学校に特別支援教室を入れる形を考えています。

(渡辺) 制度を運用していく主役は、やはり先生方ですので、ともに頑張っていきたいと思っています。

編集後記

広報に関するご意見、ご感想がありましたらお寄せください。

編集・発行 企画運営本部広報担当

各ブロック 広報係

世田谷区立深沢小学校

03-3428-8931

印刷 (株)ワールドミートイニング